

3日 金曜

列王 I



12:21 レハブアムはエルサレムに帰り、ユダの全家とベニヤミンの部族から選り抜きの戦士十八万を召集し、王位をソロモンの子レハブアムのもとに取り戻すため、イスラエルの家と戦おうとした。

12:22 すると、神の人シェマヤに次のような神のことばがあった。

12:23 「ユダの王、ソロモンの子レハブアム、ユダとベニヤミンの全家、およびそのほかの民に告げよ。

12:24 『【主】はこう言われる。上って行ってはならない。あなたがたの兄弟であるイスラエルの人々と戦ってはならない。それぞれ自分の家に帰れ。わたしが、こうなるように仕向けたのだから。』」そこで、彼らは【主】のことばに聞き従い、【主】のことばのとおり帰って行った。

12:25 ヤロブアムはエフライムの山地にシェケムを築き直し、そこに住んだ。さらに、彼はそこから出て、ペヌエルを築き直した。

12:26 ヤロブアムは心に思った。「今のままなら、この王国はダビデの家に帰るだろう。

12:27 この民が、エルサレムにある【主】の宮でいけにえを献げるために上ることになっているなら、この民の心は彼らの主君、ユダの王レハブアムに再び帰り、彼らは私を殺して、ユダの王レハブアムのもとに帰るだろう。」

12:28 そこで王は相談して金の子牛を二つ造り、彼らに言った。「もうエルサレムに上る必要はない。イスラエルよ。ここに、あなたをエジプトから連れ上った、あなたの神々がおられる。」

12:29 それから彼は一つをベテルに据え、もう一つをダンに置いた。

12:30 このことは罪となった。民はこの一つを礼拝するためダンまで行った。

12:31 それから彼は高き所の宮を造り、レビの子孫でない一般の民の中から祭司を任命した。

12:32 そのうえ、ヤロブアムはユダにある祭りに倣って、祭りの日を第八の月の十五日と定め、祭壇でささげ物を献げた。こうして彼は、ベテルで自分が造った子牛にいけにえを献げた。また、彼が造った高き所の祭司たちをベテルに常駐させた。

12:33 彼は、自分で勝手に考え出した月である第八の月の十五日に、ベテルに造った祭壇でいけにえを献げた。このように、彼はイスラエルの人々のために祭りの日を定め、祭壇でいけにえを献げ、香をたいた。

ユダの王国（南王国）に関して言えば、その王であるレハブアムは神に従わない人でありましたが、民は預言者のことばを聞いて、分裂した一方の同胞たる「兄弟であるイスラエルと」戦いませんでした。

一方分裂した片方のイスラエル（北王国）はどうかというと、その王ヤロブアムによって神様を無視して金の子牛という偶像まで作って、さまざまに主に逆らいました。これがイスラエルの不信仰を助長し、最後にはアッシリアに滅ぼされるに至ったのです。

ヤロブアムの考えにも一理あり、それは求心力を保つための政治的な手腕であったようです。しかし、何事も神様のみこころに反しては成り立たないのが現実です。そのときは成功しているかのように見えても、水面下で破綻への動きは加速し、霊的な崩壊が始まり、気が付いたときには修復不可能な状態になっているのです。

自分ではうまい判断をしているようでも、神様

のみこころに反していないか、自分の言動についても考えてみましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

